〔參照〕
海軍省達第九十三號海軍准士官下士卒任用進級試驗規則（明治二十九年十月十二日）抄錄
第十五條第四號
四　驅逐艦水雷艇ノ乘員ニ在テハ第二號ノ試驗ヲ免除シ水雷艇員教育科目ニ就キ試驗ヲ行フモノトス

海軍大臣男爵山本權兵衛

○海軍省達第九十九號
造船工務規程中左ノ通改正ス
明治三十五年十月三十一日

第十五條ノ次ヘ左ノ通追加ス

第五章　附則

第十六條　附圖諸表中ノ工數ハ工業定時間內一人ノ服業ヲ一工數トシ定時間外ノ服業ハ一人一時間ヲ以テ十分ノ一工數トシテ計算シ工數ハ服業工數ニ依リタル賃金其ノ他ノ加給並ニ旅費等ヲ給與シタルヲ合セタルモノトス

第十七條　職工ノ服業時間及賃金ハ別ニ定ムル所ニ依ル
（表式中改正アリ略ス）

○海軍省達第百號
軍艦及水雷艇類別等級別表中驅逐艦ノ欄內ニ「春雨」ヲ、水雷艇一等ノ欄內ニ「鷲、鵜、鷗、鶴、鴻」ヲ、同二等ノ欄內ニ「第七十二號、第七十三號、第七十四號、第七十五號」ヲ加フ

海軍大臣男爵山本權兵衛

○陸達第百十四號
明治三十二年陸達第百二十號裝蹄及馴毛器械定數表ヘ別冊ノ通追加ス（別冊略ス）

陸軍大臣寺內正毅

明治三十五年十一月四日

○陸達第百十五號
明治二十九年陸達第百七十三號各學校喇叭手分遣規則中左ノ通改正ス

陸軍大臣寺內正毅

明治三十五年十一月十一日

第一條中「地方幼年學校」ノ下ニ「及陸軍電信教導大隊」ヲ加フ

第三條　喇叭手分遣中ハ其ノ學校長（電信教導大隊ニ在テハ隊長以下同シ）ノ監督ヲ承ケ學校長ノ定ムル規則ヲ遵守スヘキモノトス

第五條　喇叭手分遣期限ハ概ネ一箇年トシ學校ニ在リテハ毎年二月及八月初旬電信教導大隊ニ在リテハ毎年四月及十月初旬ニ於テ半數宛交代セシム但シ地方幼年學校ノ喇叭手交代ハ校長師團長ニ協議シ適宜之ヲ定ムヘシ

第八條　陸軍電信教導大隊ヘ分遣スル喇叭手ハ明治三十五年ニ限リ十二月一日入隊セシム

第九條ヲ削除ス

學校喇叭手分遣人員表別表ノ通改正ス

（別表）

學校喇叭手分遣人員表

分遣スヘキ學校隊 ＼ 兵種	士官學校	中央幼年學校	地方幼年學校	電信教導大隊
近衛歩兵	一	二		

第一	歩兵	一		一	
	野戰砲兵	一			
	工兵				一
第二	歩兵	一		一	
	工兵				一
第三	歩兵	一		一	
	工兵				一
第四	歩兵	一		一	
	騎兵	一			
	工兵				一
第五	歩兵		一	一	
	騎兵	一			
	工兵				一
第六	歩兵		一	一	
	騎兵	一			
	工兵				一
第七	工兵				一
	歩兵		一		

第八	騎兵		一														
	工兵																
第九	歩兵		二														
	工兵																
第十	歩兵		一														
	野戰砲兵		一														
	工兵																
第十一	歩兵				一												
	野戰砲兵		一														
	工兵																
第十二	歩兵				一												
	野戰砲兵		一														
	工兵																
備考		(一) 歩兵隊ヨリ分遣スル喇叭手人員中ニハ校長ノ請求ニ據リ鼓手ヲ混用スルコトヲ得															
		(二) 電信教導大隊ヘ分遣スル喇叭手ハ明治三十五年ニ於テハ第一第三第五第七第九第十一師團ヨリ明治三十六年ニ於テハ第二第四第六第八第十第十二師團ヨリ分遣シ以後此例ニヨリ毎年交互分遣スルモノトス														

○陸達第百十六號

明治二十九年陸達第百五十一號中左ノ通改正ス

明治三十五年十一月十三日　陸軍大臣寺内正毅

第五中「野戰砲兵隊」ノ下ニ「要塞砲兵隊乙大隊」ヲ「野戰砲兵射擊學校」ノ下ニ「要塞砲兵射擊學校」ヲ加フ

【參照】

明治二十九年十月十日陸達第百五十一號ハ馬匹本分著中當分駒馬ヲ飼養セシメサル者ノ件ナリ

○陸達第百十七號

衛生材料取扱規則中左ノ通改正ス

明治三十五年十一月十七日　陸軍大臣寺内正毅

（表中改正略ス）

○陸達第百十八號

本年陸達第六十號兵器取扱規則中左ノ通改正ス

明治三十五年十一月二十四日　陸軍大臣寺内正毅

第四條中「教導隊ヲ有スル學校竝」ノ下「電信教導大隊、」又「陸軍諸官衙ノ欄註「旅團司令部」ノ下「陸軍懲治隊」ヲ加フ

第五十二條第一項中「支廠ニ返納」以下ヲ左ノ通改メ其ノ次ニ左ノ第二項ヲ加フ

支廠ニ返納シ支廠ニ在リテハ之ヲ本廠ニ返納スヘシ但軍隊備附空包用藥莢及同插彈子ハ一旦使用シタル實包用藥莢及同插彈子ノ内ヨリ良好ノモノヲ選擇シ其ノ定數ニ充足スルモノトス

狹窄射擊用藥莢ハ毎年十二月定數ノ六分ノ一ヲ返納シ交換品ノ支給ヲ受クルモノトス

第五十九條中「理由書ヲ」ノ下「徵シ之ヲ」ヲ加フ

第七十七條中「使用スヘシ」ノ下「但使用中破損ヲ生シタルモノヽ復舊ハ使用軍隊、學校ノ責任トス」ヲ加フ

（表中改正アリ略ス）

○陸達第百十九號

軍隊教育順次教令中第五表ヲ別紙ノ通改正ス

明治三十五年十一月二十九日　陸軍大臣寺内正毅

（別紙）

第五表

要塞砲兵及砲兵助卒一箇年間教育順次表

學術科	年次	大隊號	第一學期 十二月上旬ヨリ三
術科	初年兵	甲	各個教練 體操 攻守城砲隊教練 小銃射擊[illegible]行演習 小隊教練 / 海岸砲兵砲教練
		乙	各個教練 體操 攻守城砲隊教練 小銃射擊[illegible]行演習 小隊教練 / 攻守城砲兵教練
	二年兵及三年兵	甲	同上ノ課目
		乙	[illegible]
學科	初年兵	甲	勅諭 讀法 各兵種識別及性能 團隊編制ノ概要 上官ノ官姓名 武官ノ階級及服制 勲章ノ種類及起因 軍隊內務書摘要 陸軍刑法及懲罰令ノ綱要 陸軍禮式ノ摘要 武器彈藥火具ノ種類取扱法及效用ノ大意 材料被服裝具ノ名稱取扱法及
		乙	
	二年兵及三年兵	甲	初年兵第一、第二、第三期ノ課目
		乙	

期					
月下旬迄	聯隊長ノ檢閱				
第二期	第一期ノ課目 小銃狹窄射擊 小銃術 野外演習	第一期ノ課目	中隊教練	繫駕中隊教練	馬術
第二期	聯隊長ノ檢閱	同上ノ課目	砲兵教練	繫駕大隊教練	取法教練
第三期	第一、第二期ノ課目 力作 工作 游泳	第一期ノ課目 衛兵勤務 野外要務令ノ摘要 赤十字條約ノ大意 救急法ノ概要 聯隊史ノ大要 要塞砲兵要部ノ名稱及築城術ノ摘要	繫駕大隊教練 機關砲教練 漕艇術	繫駕中隊教練 水馬術	繫馬具ノ名稱 繫法及手入法 馬體ノ名稱手入法及飼養法
第四期	第一、第二、第三期ノ課目 聯隊長ノ檢閱	同上	聯隊教練	同上	同右
第五期	第一、第二、第三、第四期ノ課目 秋季演習	第一、第二、第三期ノ課目 攻守城勤務ノ摘要 艦艇ノ種類及要部名稱ノ摘要	同右	同右	同右

備考	甲大隊	乙大隊
一 二年兵及三年兵ノ術科課目ハ演習用材料ノ都合ニ依リ各期ノモノヲ繰上ケ又ハ繰下クルモ妨ナシ		
二 第四期ノ射擊ハ第五期ニ於テ行フヲ得		
三 砲兵助卒ノ教育ハ修得ノ難易ヲ顧慮シ適宜取捨スルモ妨ナシ		
四 初年兵第一期間ノ單砲教練ハ海岸砲ニ在テハ二十八珊米榴彈砲及二十四珊米加農攻守城砲ニ在テハ加農及臼砲ノ內各一種トシ第二期ヨリ爾餘諸砲ニ移ル		
五 第一期ニ於テ海岸砲砲隊教練ヲ施行スルコトヲ得		
六 輝城及函館要塞砲兵大隊ニアリテハ第一、第二期ヲ合シテ教育シ其第一期ノ檢閱ヲ四月ニ於テ行フヲ得		
七 聯隊ヲ爲サヽル要塞砲兵隊ニ在テハ聯隊教練ヲ行ハス又聯隊長ノ檢閱ハ大隊長之ヲ行ヒ第三期第四期ヲ通シテ第三期、第五期ヲ第四期トス而シテ大隊長ハ五月中旬ニ於テ第三期課目中大隊教練及射擊ヲ除キ他ノ課目ニ就キ檢閱ヲ行フ		
	一 同上	一 同上
	二 同上	二 砲兵助卒ニハ馬匹ニ關スル教育ヲ行ハス
	三 初年兵第一期間ノ攻守城單砲教練ハ加農及榴彈砲ノ內各一種トシ第二期ヨリ爾餘諸砲ニ移ル	三 初年兵第一期間ノ攻守城單砲教練ハ加農及榴彈砲ノ內各一種トシ第二期ヨリ爾餘諸砲ニ移ル
	四 初年兵ノ繫駕教練及野外演習ハ第二、第三期ニ在テハ取法ヲ除ク	四 初年兵ノ繫駕教練及野外演習ハ第二、第三期ニ在テハ取法ヲ除ク
	五 初年兵ハ第一期中小銃狹窄射擊、小銃射擊及馬術ヲ行フヲ得又第二期中取法教練ヲ行フヲ得	五 初年兵ハ第一期中小銃狹窄射擊、小銃射擊及馬術ヲ行フヲ得又第二期中取法教練ヲ行フヲ得
	六 二年兵三年兵ハ海岸砲單砲教練及漕艇術ヲ行フヲ得	六 二年兵三年兵ハ海岸砲單砲教練及漕艇術ヲ行フヲ得
	七 適宜ノ時機ニ於テ拳銃ノ操法及射擊ヲ行フヘシ	七 適宜ノ時機ニ於テ拳銃ノ操法及射擊ヲ行フヘシ
	八 第二期以後ニ於テ徒步教練中中隊及大隊ノ整列竝ニ單獨ナル運動ヲナシ得ルニ至ラシム	八 第二期以後ニ於テ徒步教練中中隊及大隊ノ整列竝ニ單獨ナル運動ヲナシ得ルニ至ラシム
		九

○海軍省達第百一號

機關ニ關スル用語別冊ノ通定ム

但シ別冊ハ必要アル向ニ配賦ス　（別冊略ス）

明治三十五年十一月五日

海軍大臣男爵山本權兵衛

○海軍省達第百二號

横須賀海軍造船廠ニ於テ製造ノ第一號三等巡洋艦ヲ新高（ニイタカ）ト命名セラル

明治三十五年十一月十五日

海軍大臣男爵山本權兵衛

海軍大臣男爵山本權兵衛

○海軍省達第百三號

軍艦新高ヘ信號符字左ノ通賜付ス

明治三十五年十一月十五日　海軍大臣男爵山本權兵衛

G　Q　N　C　新高

○海軍省達第百四號

軍艦及水雷艇類別等級別表中巡洋艦三等ノ欄内ニ「新高」ヲ加フ

明治三十五年十一月十五日　海軍大臣男爵山本權兵衛

○海軍省達第百五號

鎮守府會計監督規程中左ノ通改ム

明治三十五年十一月十五日　海軍大臣男爵山本權兵衛

第一條中「軍港内」ヲ「管區内」ニ改メ「諸官廳」ノ下ニ（東京各廳ヲ除ク）ヲ加ヘ第三條ニ左ノ一號ヲ加フ

六　歳入歳出外現金出納計算書ノ下檢査ヲ執行スルコト

第四條中「百圓」ヲ「二百圓」ニ第九條第一項中「所管各部及軍港内ニアル其ノ他ノ」及但以下ヲ削リ「諸官廳」ノ下ニ（東京各廳ヲ除ク）ヲ加ヘ第二項「須要ト認ムルトキ」ノ下ニ「又ハ所管鎮守府經理部長ノ委托ヲ受ケタルトキ」ヲ加ヘ「第二十一條中「八月三十一日」ヲ「八月十五日」ニ改メ第二十一條ノ次ニ左ノ第二十二條ヲ加ヘ「第二十二條」ヲ「第二十三條」ニ改メ書式ノ末行「以下實況檢査ニ於テ調査シタル事項其他必要ナル事件ハ別記スヘシ」ヲ削リ別紙書式ヲ加フ

第二十二條　經理部長ハ三箇月ヲ一期トシ別紙書式ニ依リ其ノ期間ニ執行シタル物品檢査報告ヲ作リ毎期經過後十五日迄ニ海軍大臣ニ出スヘシ

（別紙）

明治何年何月物品檢査報告

物品ノ種別	物品官吏ノ官氏名	檢査執行ノ年月日	檢査執行ノ期間	檢査ノ種別	檢査ノ方法	檢査ノ成績
（何　廠）兵器器械及附屬器具	（何　官）兵備品會計官吏	（明治何年何月何日）	（明治何年何月何日自何月何日至何月何日）	物品會計規則第十條ノ檢査	全部檢査（備ノ所在ト認メタル事項ヲ記載スルモノトス但疑問ノ事項ハ別紙ニ記載スヘシ）	
（何　廠）（何　〃）通常物品	（何　官）會計官吏	（明治何年何月何日）	（明治何年何月何日自何月何日至何月何日）	（何　〃）	一部檢査	（右　同）
（某艦何〃）（何　〃）兵備品	（何　官）取扱主任	（明治何年何月何日）	（明治何年何月何日自何月何日至何月何日）	（何　〃）	一部檢査	（右　同）

○海軍省達第百六號

艦團部ニ於テ左記ノ需品ハ各其ノ定額表ノ數量ニ依リ前渡金ヲ以テ直接調辨供用スヘシ其ノ調辨シタルモノハ品名數量代價ヲ詳記シ前月分ヲ翌月頭ニ所管鎮守府所在地ノ海軍需品庫ニ報告スヘシ

但薪水炭ハ軍艦（第三國備艦ハ除ク）水雷艇航海中及軍港外ニアル部團隊ニノミ適用ス艦艇軍港ニ在テ修理等ノ際陸上ニ於テ炊事ニ要スル薪ハ需品經理規程ニ依リ主管別豫算ヲ以テ臨時供給ヲ海軍需品庫ニ要求スヘシ

明治三十五年十一月十五日　海軍大臣男爵山本權兵衛

机椅子腰掛等ノ殺及日覆ノ洗濯　官報　法令全書　職員錄　艦隊達摘錄

要港部達摘錄　郵便切手　薪松或ハ堅木　清水　木炭　油紙　簿記用小印

竹皮　供餅糊米一斗　飾松　炭酸瓦斯製氷機用　臨化カルシユーム

○海軍省達第百七號

明治二十五年一月達第一號ヲ廢ス

明治三十五年十一月十五日　海軍大臣男爵山本權兵衛

〔參照〕

明治二十五年一月七日海軍省達第一號ハ艦艦備品中艦隊ニ於テ現金ヲ以テ直ニ處辨スルノ件ナリ

○海軍省達第百八號

明治二十四年達第百八十四號貸與品表中机掛ノ次ニ左ノ一行ヲ加フ

明治三十五年十一月十五日　海軍大臣男爵山本權兵衛

同　護謨引金巾　上等　同

○海軍省達第百九號

雜役船舟還納及廢却手續第五條ヲ左ノ通改ム

明治三十五年十一月十九日　海軍大臣男爵山本權兵衛

第五條　造船廠長前條ニ依リ廢船舟及附屬物ヲ造船材料ニ組入レタルトキハ其組入價格ヲ又賣却處分シタルトキハ其賣却代價及豫定價格ヲ一艘毎ニ明記シ海軍艦政本部長ニ報告スヘシ

〔參照〕

海軍省達第八十三號雜役船舟還納及廢却手續(明治三十五年九月八日)抄錄

第五條　造船廠長前條ニ依リ廢船舟及附屬物ヲ賣却處分シタルトキハ其賣却代價及豫定價格ヲ一艘毎ニ明記シテ海軍艦政本部長ニ報告スヘシ

○海軍省達第百十號

海軍氣象信號法中地名ノ部　二四五　中國　ノ次ニ左ノ通追加ス(追加略ス)

明治三十五年十一月二十四日　海軍大臣男爵山本權兵衛

○海軍省達第百十一號

海軍下士卒手當金支給細則中左ノ通改正ス

明治三十五年十一月二十六日　海軍大臣男爵山本權兵衛

第二條　規則第一條ノ二ノ手當金ハ第一表、同第二條第一第二及第四ノ手當金ハ第二表、同第三條ノ手當金ハ第三表ニ依リ之ヲ支給ス但シ規則第三條ノ暑期ハ第四表ノ緯度及期日ニ依ル

規則第一條ノ二ノ場合ニ在テ氣溫四十度以下ニ於ケルトキハ一圓以內、同第二條第三ノ場合ニ在テハ二十五錢以內ニ於テ勞働ノ難易ニ應シ適宜支給スルコトヲ得

第三條　前條ノ手當金ハ艦團其ノ他各部ニ於ケル豫算金額ノ狀況若ハ勞働ノ難易ニ依リ適宜之ヲ減給シ若ハ給セサルコトヲ得

第五條第一號中「旅費日當」ヲ「旅費ノ日當、宿泊料若ハ食卓料」ニ改ム

第八條　規則第一條ノ二乃至第三條ノ手當金ヲ支給シタルトキハ艦團其ノ他各部ノ長ハ別紙書式ニ依リ月報ヲ調製シ所管長官ヲ經テ海軍大臣ニ報告スヘシ

第一表ヲ左表ノ通改ム

第一表

時間 / 事項 / 等級	五時間以上	五時間未滿	四時間未滿	三時間未滿	二時間未滿
一級	二級	三級	四級	五級	
水底五尋未滿	七十五錢	六十錢	四十五錢	三十錢	十五錢
水底五尋以上	一圓	八十錢	六十錢	四十錢	二十錢

第二表

時間 / 等級	八時間以上	八時間未滿	六時間未滿	四時間未滿	二時間未滿
一等郵便局	一級	二級	三級	四級	五級
二等郵便局	二十錢	十六錢	十二錢	八錢	四錢

「第二表」ヲ「第三表」ニ改メ同表中備考ノ欄ヲ削リ「第三表」ヲ「第四表」ニ改ム

（別紙）

書式（用紙第百號）

明治　年　月分勞働手當金支給報告

摘要	金額
規則第一條ノ二及第二條ノ手當金	五〇〇〇〇〇
規則第三條ノ手當金	五〇〇〇〇
計	五五〇〇〇〇

右及報告候也

明治　年　月　日

海軍大臣殿

職氏名㊞

備考　本報告ハ毎月五日マテニ調製進達スヘシ
手當金ノ支給ナキ月ハ其ノ旨ヲ經理局長ニ通知スヘシ

【參照】

海軍省達第八十三號（海軍下士卒手當金支給細則（明治三十年七月三十一日）抄錄）

第二條　規則第二條第一、第二、第四及第五ノ手當金ハ第一表ニ甚年之ヲ支給ス但氣溫四十度以下ニ於ケル水底工業及同條第三ノ事業ハ勞働ノ離島ニ依リ適宜二十五錢以內ヲ支給スルコトヲ得

第三條　規則第三條ニ掲クル各事項ノ手當金ハ第二表ニ甚年之ヲ支給ス但暑期ハ第三表ノ緯度及期日ニ照シ支給スルモノトス

第五條　規則第五條ニ依リ手當金ヲ停止スルハ左ノ區分ニ依ル

一　糧食金日分若クハ旅費日當ヲ給スルトキハ其ノ間但勤務歸到著ノ日若クハ退職ノ當日ハ糧食金日分ヲ給スルモ此ノ限ニアラス

第八條　規則第二條第三條ノ手當金ヲ支給シタルトキハ艦船團其ノ他各部ノ長ハ其ノ申出ヲ俟チシタル月限ヲ隨時シ所管長官ヲ經由シテ海軍大臣ニ報告スヘシ

○海軍省達第百十二號

横須賀海軍造船廠ニ於テ製造ノ第十八號驅逐艦ヲ村雨（ムラサメ）ト命名セラル

明治三十五年十一月二十九日　海軍大臣男爵山本權兵衛

○海軍省達第百十三號

驅逐艦村雨ヘ信號符字左ノ通賜付ス

G Q N D　村雨

明治三十五年十一月二十九日　海軍大臣男爵山本權兵衛

○海軍省達第百十四號

軍艦及水雷艇類別等級別表中驅逐艦ノ欄內ニ「村雨」ヲ加フ

明治三十五年十一月二十九日　海軍大臣男爵山本權兵衛

○會計檢査院達第六號

郵便爲替金郵便貯金郵便取立金出納計算證明規程左ノ通リ定ム

明治三十五年十一月十三日　會計檢査院長法學博士男爵田尻稻次郎

郵便爲替金郵便貯金郵便取立金出納計算證明規程

第一條　郵便爲替貯金出納官吏及出納員ノ證明スヘキ計算書ニシテ郵便爲替貯金管理所及臺灣總督府民政部通信局出納ニ係ルモノハ第一號書式他ノ各局所出納ニ係ルモノハ第二號書式ニ據ルヘシ

計算書ノ提出期限ハ年度經過後一箇月以内又交替ヲ爲シタルトキハ其交替後三十日以内トス

第二條　身元保證金ヲ納メタル分任出納官吏及出納員交替ノトキハ特ニ其計算書ヲ調製シ證明ヲ爲スコトヲ得但此場合ニ在リテハ主任出納官吏ヲ經由スヘシ

第三條　左ノ事項ハ出納計算書ノ備考ニ記載スヘシ

一　會計規則第八十八條ニヨリ辨償ヲ命セラレタルモノアルトキハ其金額事由

二　殘高ニシテ後任官吏又ハ他ニ引繼キタルモノアルトキハ其事由

第四條　出納計算書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ

一　會計規則第九十三條ニ依レル檢定書

二　歳出ヨリ受入タルモノアルトキハ其事由ヲ詳記シタル明細書

三　歳入ヘ納付シタルモノアルトキハ其事由ヲ詳記シタル明細書

第五條　下檢査ヲ執行スル官吏ニ於テ出納計算書ヲ受ケタルトキハ十五日以内ニ下檢査ヲ執行シ之ヲ提出スヘシ

第六條　下檢査書ニハ左ノ事項ヲ記載スヘシ

一　出納計算書及附屬書類ノ件名及冊數

二　事實ニ適合セスト認定シタル事項ノ金額及事由

第七條　審理書及答辯書ハ下檢査ヲ執行スル官吏ヲ經由スヘシ

附則

第八條　本規程ハ明治三十五年度分ヨリ施行ス

郵便爲替金郵便貯金出納計算證明規程ハ明治三十四年度分限リ廢止ス

第一號書式

一　計算書ヲ受授スル書ハ其年月日ヲ冰書ニ記載スヘシ

二　用紙ハ堅牢ナルモノヲ用ユヘシ

三　計算書ハ改竄塗抹ヲ禁ス若シ誤記脱字等ニテ訂正ヲ爲シタルトキハ二線ヲ横畫シ主任官吏之ニ捺印スヘシ

書算計納出金立取金貯替爲郵便(自五月月日日)度年　治明

摘要	受高	摘要	拂高	備考
高納交替ヨリ受入高	圓 錢 厘	高入託付ヘ供納金庫入中央銀何ヶ	圓 錢 厘	殘高區分
高入戻ヨリ加納金出納交替中銀何ヶ	0 0 0 0		0 0 0 0	氏名 0
	計 0		計 0	任官吏 0
	殘高 0		殘高 0	納出 0
	合計 0		合計 0	納官吏 0
				出納官吏 0
				任官吏 0
				主任出納官吏 0

身元保證金

主任出納官吏氏名　0圓

分任出納官吏氏名　0圓

明治　年度出納計算證明書

郵便爲替金郵便貯金郵便取立金出納計算證明規程

印名氏官職

會計檢査院長宛

年　月　日

第二號書式　凡例前ニ同シ

爲替計算納出金立取金貯替爲郵便(月日)(年度)　明治　年度

摘要	受高	摘要	拂高	備考
高領受金	0	高付納金	0	
高領受金替	0	高付納金超過	0	
高受金超過立替	0	高拂渡金超過立替	0	
受時	0	拂渡時	0	
計	0	計	0	
高出納金	0	高渡拂金	0	
高預金	0	高渡拂金	0	
高受金	0	高渡拂金立替	0	
高受金立替	0	高渡拂金立替爲貯取何	0	
高受金爲貯取何	0			
合計	0	合計	0	殘高區分
越高	0	殘高	0	主任出納官吏官氏名　0
總計	0	總計	0	分任出納官吏官氏名　0
				出納員公官氏名　0

身元保證金

主任出納官吏官氏名　0　圓
分任出納官吏官氏名　0　圓
出納員官氏名　0　圓

明治　年度出納計算證明候也

職官氏名　印

宛　會計檢査院長

年　月　日

○宮內省達甲第三號

明治三十一年二月宮內省達甲第二號御料局地方部局員職服徽章表中左ノ通改正シ明治三十六年一月一日ヨリ施行ス

明治三十五年十二月十一日　宮內大臣子爵田中光顯

奉勅

一判任ノ欄「事務所出張所伐木事業掛次席者」ヲ「事務所出張所次席者、分擔區在勤技手、伐木事業掛技手」ニ改メ「分擔區員、伐木事業掛員」ヲ「分擔區在勤技手補、伐木事業掛技手補」ニ改ム

一上衣袖章ノ欄及帽摺式ノ欄「次席者」ノ下ニ「分擔區在勤技手伐木事業掛技手」ノ十四字ヲ加フ

○宮內省達乙第一號

來明治三十六年一月　皇太子　同妃兩殿下葉山御用邸御滯在ニ付高等官及有爵有位華族ハ新年賀表ヲ同所ニ向ケ差出スヘシ

明治三十五年十二月二十四日　宮內大臣子爵田中光顯

○陸達第百二十號

陸軍平時備人定員表中左ノ通改正ス

明治三十五年十二月二日　陸軍大臣寺內正毅

臺灣陸軍獸醫部ノ次ニ左ノ區畫ヲ加フ

陸軍醫治獸				
	一	二	三	四

陸軍電信教導大隊

○陸達第百二十一號

火藥火具取扱規則別冊ノ通定ム

明治三十五年十二月九日

陸軍大臣寺内正毅

（別冊）

火藥火具取扱規則

第一節　總則

第二節　作業

第一章　火藥

第一　裝藥ノ調製

其一　黑色藥

其二　褐色藥

其三　無煙藥

第二　炸藥ノ塡實

其一　黑色藥

其二　黃色藥

第三　炸藥ノ抽出

第二章　火具

第三章　實包及小銃空包

第三節　貯藏

第一章　火藥

第一　尋常藥

第二　無煙藥

第二章　火具

第三章　實包

第四節　運搬

第五節　檢査

第一章　尋常藥及黃色藥

第二章　無煙藥

第三章　火具

第四章　實包

第六節　不良品ノ處置

第七節　不良品及廢品ノ處分

火藥火具取扱規則

第一節　總則

第一條　平時ニ於ケル火藥火具ノ取扱ハ特ニ規定アルモノヽ外總テ本規則ノ規定ニ據ル

第二條　本規則ニ於テ火藥ト稱スルハ左ノモノヲ云フ

尋常藥（黑色藥　褐色藥）

無煙藥（小銃藥、力形藥、帶狀藥、空包藥）

黃色藥

第三條　本規則ニ於テ火具ト稱スルハ雷管、信管、爆管、爆發管、門管、導火索ノ類ヲ云フ

第四條　本規則ニ於テ實包ト稱スルハ小銃、拳銃實包及小銃狹窄射擊實包ヲ云フ

第五條　本規則ニ於テ乾燥季ト稱スルハ攝氏十五度ニ達セサル季節ヲ云フ

第六條　本規則ニ於テ甲種彈ト稱スルハ二十一瑯米及ヒ其ノ以上ノ彈丸ニシテ乙種彈ト稱スルハ其ノ以下ノモノヲ云フ

第二節　作業

第七條　作業ニ從事スル人員ハ作業上必要ナル最少極限ヲ超過スヘカラス

第八條　一作業場內ニ數多ノ作業班ヲ設クヘカラス

第九條　各作業場間ニハ避害牆ノ設アルカ若ハ相當ノ間隔ヲ存シ萬一ノ際危害ノ相互ニ波及スルコトナキヲ要ス

第十條　作業ニ從事スルモノハ清潔ナル作業服ヲ著用シ就業前ニハ洗手スヘシ

第十一條　作業場內ニハ作業上必要ナル最少極限外ニ火藥火具ヲ置クヘカラス

第十二條　容器ヲ開クハ作業場內ニ於テシ日光ノ直射ト水濕ヲ避ケ打擊劇動ヲ戒メ愼重ニ施行スヘシ

第十三條　容器ヲ開ツルニモ前條同樣ノ警戒ヲ加ヘ殊ニ容器ノ密閉ニ注意スヘシ

第一章　火藥

第十四條　粒狀及方形ノ火藥ヲ取扱フニハ必ス藥匙及藥斗ヲ以テスヘシ

第十五條　藥匙及藥斗ハ藥種ノ異ナル毎ニ必ス之ヲ清拭スヘシ

第十六條　無煙藥及ヒ黃色藥ヲ取扱フニハ清潔ナル白色手套ヲ穿ツヘシ

但シ黃色藥ノ取扱ニ供用シテ黃染シタル手套ハ洗濯後尙ホ黃染シアルモ黃色藥用トシテ使用スルハ妨ケナシ

第一　裝藥ノ調製

第十七條　裝藥ノ調製ハ火工所若ハ裝藥調製所ニ於テスヘシ

但シ火工所若ハ裝藥調製所ノ設ケナキトキハ適宜ノ位置ニ床板ヲ置キ天幕ヲ張リ其ノ內ニ於テスヘシ

第十八條　作業間ハ床上ニ毛布ヲ敷キ尙ホ其ノ上ニ敷布ヲ布キ終業後ハ濕或ハ濕地ニ於テ之レヲ拂ヒ若ハ作業所ヨリ五十米以上隔リタル地ニ至リ之レヲ拂ヒ其ノ塵埃ニハ注水スヘシ

第十九條　裝藥ノ調製ハ秤量ノ誤謬ヲ避クル爲メ一時ニ異量ノモノヲ調製スヘカラス

第二十條　某裝藥ノ調製ニ著手スルニハ之レカ爲メ所內ヲ整頓シ又他ノ裝藥調製ニ移ルトキハ更ニ所內ヲ整頓シテ後著手スヘシ

第二十一條　調製セシ裝藥ハ直チニ箱ニ收メテ搬送シ二箱以上停滯スルヲ許サス

第二十二條　所內ノ整頓法左ノ如シ

甲　作業命令

乙　秤器ノ準備

丙　藥囊(藥莢)ノ準備

丁　火藥ノ準備

甲　作業命令

第二十三條　所內適宜ノ位置ニ於テ高サ約一米五十糎ノ處ニ塗板ヲ掲ケ之レニ作業命令ヲ記載ス

共ノ記載スヘキ事項概ネ左ノ如シ

裝藥ノ種類、所用藥莢、(六穜藥及無煙藥ナルトキハ點火藥ノ種類及數量)、藥囊ノ種類、裝藥ノ尺度及調製スヘキ員數

乙　秤器ノ準備

第二十四條　秤器ハ所內最モ便宜ノ位地ニ設備シ所用以外ノ分銅ハ之ヲ箱外ニ出シ置クヘカラス

秤器ノ數之レヲ許サハ二箇ヲ備ヘ一箇ヲ秤量ニ他ヲ點檢用トスヘシ

丙　藥囊(藥莢)ノ準備

第二十五條　作業命令ニ示シタル裝藥ニ適當スル種類ノ藥囊(藥莢)ヲ同命令ノ員數(分銅ノ一部トシテ用ヰタルモノハ員數外トス)ニ照シテ準備ス

藥囊ハ風乾シ且ツ破綻若ハ汚垢ノ有無ヲ點檢シ尚ホ塵埃ヲ拂除スヘシ特ニ藥莢ニアリテハ其內部ニ脂油若ハ錆鏽アルヘカラス

輕量ノ裝藥ニアリテハ秤量ニ便ナル爲メ同一種ノ紙ヲ以テ容易ニ定量ノ火藥ヲ容ルヘキ同尺度ノ紙囊若干ヲ作リ秤量ノ後藥囊(藥莢)ニ移スヲ可トス

無煙藥ニアリテハ先ツ點火藥ヲ點火藥囊ニ塡實スヘシ

丁　火藥ノ準備

第二十六條　準備スヘキ火藥ノ箱數ハ左ノ限界以內トス但シ無煙藥ニ在リテハ要スレハ一箱以內ヲ增加スルコトヲ得

裝藥ノ種類	甲種彈裝藥		乙種彈裝藥
火藥箱數	榴射砲	平射砲	
	四	六	二

第二十七條　所內ノ整頓終レハ主任者ハ親シク之レヲ點檢シ殊ニ分銅及紙囊ヲ調査シ紙囊ニハ檢印ヲ捺スヘシ

第二十八條　裝藥ハ火藥ノ種類ニ依リ左ノ如ク其ノ調製法ヲ異ニス

共一　黑色藥

第二十九條　同種ノ藥囊(要スレハ紙囊)二箇ヲ取リ一箇ヲ分銅ト共ニ一皿ニ盛リ他ノ一箇ニ略ホ適量ナル火藥ヲ容レ之レヲ天秤ニ致シ藥量ヲ增減シテ精密ニ平衡ヲ得ルニ至ルヘシ要スレハ其ノ一粒ヲ破壞スルモ可ナリ

共二　六穜藥

第三十條　樊範ニヨリ定數ノ藥粒及點火藥(點火藥ハ最上層中央)ヲ堆積セハ藥囊ヲ之レニ致シ緊束シテ秤量ス其ノ方法黑色藥ト異ナルコトナシ

共三　無煙藥

第三十一條　無煙方形藥ヲ用フル裝藥ノ調製法ハ第二十九條ノ方法ニ從フ

無煙帶狀藥ハ前ト同一ノ方法ニヨリテ秤量シ要スレハ之レヲ緊束シ然ル後藥囊若ハ藥莢ニ塡實

ス但シ藥莢ニ塡實スル場合ニ在リテハ其ノ制式上之レヲ要スレハ先ツ點火藥ヲ莢底ニ裝スヘシ

第二　炸藥ノ塡實

第三十二條　塡藥ハ火工所若ハ炸藥塡實所ニ於テスヘシ

但シ火工所若ハ塡實所ノ設ケナキトキハ適宜ノ位置ニ床板ヲ置キ天幕ヲ張リ其ノ內ニ於テスヘシ

第三十三條　塡藥ヲ行フニハ床上ニ毛布及敷布ヲ布キ甲種彈ニ在リテハ送彈車ノ車轍ニ應シテ木板ヲ配設ス水板及塡實盤ニハ時々濡水シ全乾セサラシムルヲ要ス

第三十四條　作業場ハ總テ淸潔ニシ終業後毛布及敷布ハ第十八條ノ如ク處分スヘシ

第三十五條　塡藥作業逃日繼續ノ場合ニ在リテハ作業所ノ床面ハ每週一回洗淨スヘシ

第三十六條　所內ニハ火藥一箱以上ヲ置クヘカラス

第三十七條　火ヲ用フル作業ハ作業場ヨリ五十米以上隔リタル風下ノ所ニ於テスヘシ

第三十八條　塡藥ハ黑色藥ト黃色藥トニ從ヒ左ノ如ク其ノ方法ヲ異ニス

其一　黑色藥

第三十九條　塡藥ニ先チ適宜ノ桿頭ニ白布ヲ附シ彈丸ノ內部ヲ拭フテ點檢スヘシ其ノ際土砂水分若ハ塗料ノ剝片等アルヲ發見セハ其ノ事故ヲ除去シタル後塡藥スヘシ

第四十條　炸藥靈ヲ用ヒサル彈丸ニ塡藥スルニハ徐々ニ少量宛ノ火藥ヲ炸藥室孔ニ注キ塡實桿ヲ用ヰテ其ノ澁滯ヲ豫防シ火藥自然ノ重量ニ任シテ降下セシムヘシ

第四十一條　大炸藥靈ヲ用フル彈丸ノ塡藥ハ先ツ其ノ靈ヲ風乾シ塡藥ノ際破綻若ハ汚垢ノ有無ヲ點檢シ且塵埃ヲ拂除シ炸藥室內ニ挿入シ靈底ノ儘カニ室底ニ觸ルヽヲ度トシ然ル後前條ノ要領ニ從ヒ塡藥ヲ行フ

第四十二條　炸藥ハ總テ定量ヲ秤量シテ之レヲ塡實シ其ノ全量十分ノ一以上ノ殘餘アルトキハ炸藥ヲ抽出シテ更ニ塡藥スヘシ

第四十三條　塡藥ヲ終レハ麻糸ヲ以テ炸藥靈口ヲ括リ其ノ結節ハ點火ヲ妨ケサル爲メ斜ニ孔內ニ挿入シ又炸藥靈ヲ用ヰサル彈丸ハ麻屑ヲ信管孔ニ挿シ(此麻屑ハ信管螺著ノ際除去ス)然ル後要スレハ溶解蠟劑(黃蠟一〇、豕脂二、松脂一、)ニ浸シタル螺塞ヲ螺著ス

第四十四條　小炸藥靈ハ大炸藥靈ト同一ノ注意ヲナシタル後定量ノ火藥ヲ塡實シ靈口ヲ縫合スヘシ

第四十五條　塡藥シタル小炸藥靈ヲ彈丸ニ塡實スルニハ一箇宛塡實シ塡實桿ヲ以テ之レヲ緊壓スヘシ

第四十六條　凡テ小炸藥靈ハ規定ノ員數ヲ揃備シテ塡實シ全量八分一以上ノ殘量アルトキハ炸藥靈ヲ抽出シ更ニ塡實スヘシ

其二　黃色藥

第四十七條　炸藥ノ被包ハ能ク之ヲ點檢シ假令僅少ノ毀損アルモ之レヲ修理スルニ非サレハ使用スヘカラス

第四十八條　塡藥ニ先チ白布ヲ以テ彈丸ノ內部ヲ淸拭スヘシ其ノ際塗漆ノ剝脫セルモノアラハ更ニ塗漆シタル後塡藥スヘシ

第四十九條　炸藥ノ被包ニハ其ノ圓壔部ノ下端若干部及底部ヲ除キ其ノ他ノ部面ニ脂肪(黃蠟四、礦蠟(パラフヰン)一、礦脂(ワセリン)二、)ヲ潤澤ニ塗抹シ被包ヲ毀損セサル如ク之レヲ徐々ニ炸藥室內ニ挿入シ然

ル後壓搾器ヲ以テ正シク其ノ位置ニ壓入シ其ノ周圍ニ溢出シタル脂肪ハ全ク除去スヘシ

第五十條　塡藥ヲ終レハ彈底ヲ螺著ス要スレハ螺子部ニ蠟劑（メニーヲ用フルヲ許サス）ヲ施シ緊塞ヲ確實ニスヘシ若シ炸藥ト彈底ノ緊壓充分ナラサレハ紙塞ヲ其ノ間ニ挿スヘシ

彈丸ノ二部ニ分離セルモノハ前條要領ニ從ヒ各別ニ之レヲ塡實シ後之レヲ結合ス若シ兩炸藥間ニ遊隙アルトキハ紙塞ヲ用ヒテ之レヲ緊壓スヘシ

第三　炸藥ノ抽出

第五十一條　榴霰彈ノ炸藥ヲ抽出スルニハ之レヲ倒ニ吊シ木槌ヲ以テ打チ塡實桿ヲ使用シ火藥ノ落出ヲ容易ニスヘシ

十五珊米以上ノ彈丸ヲ吊スニハ繩ヲ以テ彈丸ノ重心位置ヨリ約三珊米隔タル處ヲ縛シ滑車ニテ吊シ上クヘシ

第五十二條　榴彈ノ炸藥ヲ抽出スルニハ啄螺ヲ除キ之レヲ平臥シ炸藥抽出桿ヲ以テ火藥ノ搔キ出スヘシ斯クノ如クシテ抽出シ能ハサルニ至レハ前條ノ要領ニ從ヒテ抽出ス

大炸藥壺ヲ用ヒタル彈丸ハ最後ニ其ノ壺ヲ抽出ス

第五十三條　小炸藥壺ヲ用ヒタル炸藥ヲ抽出スルニハ啄螺ヲ脫シ彈丸ヲ平臥シ炸藥抽出桿ヲ用ヒ一箇ヅヽ之レヲ抽出ス

第五十四條　黃色藥ヲ脫出セントニハ先ヅ信管ヲ除キ彈頭部若ハ彈底ヲ解脫シ湯ニテ溫メ脂肪ノ溶解スルヲ待チテ徐々ニ抽出スヘシ

如斯スルモ抽出シ能ハサルモノハ第百四十五條ニ據リテ處分ス

第二章　火具

第五十五條　信管ハ射擊ニ先チ危險ヲ及ホス虞ナキ所ニ於テ裝著スヘシ

第五十六條　彈底信管ヲ裝著スルニハ其ノ螺子部ニ左ノ塗劑ヲ施スヘシ

黑色藥ヲ炸藥トセル彈丸ニ在リテハ（先ヅ其ノ螺子部ノ蠟劑ヲ清拭シタル後）メニー、

黃色藥ヲ炸藥トセル彈丸ニ在リテハ第四十九條ノ脂肪

第五十七條　信管ハ螺鍋ヲ用ヒ臂力ヲ以テ靜カニ著脫スヘシ而シテ其ノ附近ニハ所要以外ノ人ヲ置クヘカラス

第三章　實包及小銃空包

第五十八條　實包及小銃空包ノ調製及分解ハ火工所ニ於テスヘシ但シ同時ニ二種以上ノ作業ニ從事スヘカラス

第五十九條　實包及小銃空包ヲ調製スルニハ千發分以上ノ火藥ヲ所內ニ置クヘカラス又調製シタルモノヽ處分ハ第二十一條ニ據ル

第三節　貯藏

第一章　火藥

第六十條　火藥ハ凡テ規定ノ容器ニ容レテ密閉シ左ノ區分ニ從ヒ各別ノ火藥庫ニ格納ス

甲　尋常藥

乙　無煙藥（無煙空包藥ヲ含ム）

丙　黃色藥

要スレハ黃色藥ハ尋常藥ト同庫ニ格納スルコトヲ得

第六十一條　火藥庫ハ乾燥ニシテ夏季清涼ナルヲ要スルモ尋常藥及黃色藥ニ在リテハ特ニ乾燥ヲ

要シ無煙藥ニ在リテハ特ニ清涼ナルヲ必要トス

第六十二條　夏季火藥庫ニ出入スルニハ成ルヘク朝夕清涼ノ時ニ於テスヘシ

第六十三條　火藥庫ノ窓戸ハ硝子戸及雨戸共常ニ閉鎖シ置クヘシ

第六十四條　火藥庫ニ入ルモノハ靴及劒ヲ脫シ且燐寸其ノ他發火ノ虞アル器具ヲ携行スヘカラス

第六十五條　火藥庫內ニ於テハ容器ヲ轉轉、滑走、車送若ハ開閉スヘカラス

第六十六條　火藥庫ニハ示差寒暖計一個ヲ備ヘ庫內最高溫度ノ位置ニ懸吊シ置クヘシ

第六十七條　火藥庫ハ乾燥期ニ於テ連晴ノ日ヲ擇ミ窓戸ヲ開キ太陽ニ對スル窓戸ニハ窓覆ヲ掛ケ空氣ヲ流通セシムヘシ

其ノ他ノ季間ト雖モ連晴乾燥ノ日ニハ本條ノ注意ヲナスヘシ

第六十八條　避雷針及電導子ハ每年一回夏季ノ初ニ於テ其ノ導力ヲ檢査スヘシ

第六十九條　火藥箱ノ堆積ハ周壁ヨリ四十珊米以上ヲ隔テ各堆積間ニハ通路ヲ設クヘシ

第七十條　火藥箱ハ爲シ得レハ各檢査每ニ堆積ノ上下層ヲ轉換スルヲ要ス

第一　尋常藥及黃色藥

第七十一條　尋常藥及黃色藥ハ種類及製造年月（尋常藥ニ在リテハ製造所）相等シキモノヲ以テ一堆トナシ其最下層ニハ約三寸角ノ枕材ヲ置クヘシ而シテ堆積ノ高サハ二米五十糎ヲ超過スヘカラス

第二　無煙藥

第七十二條　無煙藥ノ堆積法ハ前條ニ準ス但シ各層間ニハ空氣ノ流通ヲ完全ナラシムル注意ヲ要ス

第七十三條　無煙藥ヲ貯藏スル倉庫ハ夏季ニ在リテハ每週一回寒暖計ヲ檢査スヘシ

第七十四條　無煙藥ハ製造所、種類及製造年月相等シキモノ每ニ履歷表ヲ製シ耐熱試驗ノ成蹟其ノ他保存上必要ノ事項ヲ記スヘシ

第二章　火具

第七十五條　火具ハ總テ箱ニ收容シテ貯藏ス而シテ其ノ箱ノ表面ニハ收容品目、其ノ員數、製造年月並ニ箱ニ收容シタル年月ヲ記スヘシ

第七十六條　火具ハ火具庫ニ貯藏スルヲ法トス但シ火具庫ノ設ナキ時ハ彈丸庫若ハ彈藥庫ニ貯藏スルモ妨ケナシ

第七十七條　火具庫ニハ第六十四條、第六十五條、第六十七條及第七十條ノ注意ヲナスヘシ

第七十八條　火具ノ收容箱ハ第六十九條及第七十一條ノ要領ニ依リテ堆積ス但シ導火索ヲ除クノ外ハ其ノ堆積ノ高サ一米八十糎ヲ超過スヘカラス

第七十九條　導火索ヲ貯藏スルニハパラヒーヌヲ施シタル紙ヲ以テ其ノ端末部ヲ包ミ麻糸ニテ緊結シ箱內ニ收メ箱ニハ目張ヲナスヘシ

第八十條　目張リヲナシタル箱若ハ罐詰ノ口ヲ切リ或ハ特ニ濕氣ヲ防ク裝置ヲ爲シタル被包ヲ開クハ連晴乾燥ノ日ニ於テスヘシ

第八十一條　罐詰ノ蓋ヲ切リタル火具ヲ貯藏スルニハ再ヒ其蓋ヲ盤陀著ケニスルカ若ハ要塞火藥罐（同火藥箱）ニ轉納スヘシ但シ已ムヲ得サレハ其ノ罐ニ目張リヲナシ若ハ蠟劑ヲ以テ目塗ヲナス可シ

第八十二條　藥莖類ハ火藥箱內ニ收容シ密閉シテ格納ス

第八十三條　雷汞類ハ毎年一回盛暑ノ季ニ於テ運搬ノ日ヲトシ容器ヨリ出シ容器ト共ニ日光ニ曝シ風乾シテ再ヒ之ヲ容器ニ收ム其ノ法先ツ揮發油ヲ浸セル布片ヲ以テ容器内ヲ擦拭シ厚紙片ニ同油ヲ浸セルモノト固形防虫劑片若干ヲ置キ其ノ上ニ雷汞若干ヲ置キ再ヒ同紙片ト固形防虫劑トヲ置キ更ニ雷汞若干ヲ置ク如此クシテ容器ヲ充タシ最後ニ又同紙片ト防虫劑ヲ置キ蓋ヲ密閉シテ之レヲ貯フ

第八十四條　雷汞貯藏用ノ揮發油ハ地方ノ便宜ニ依リテレメン精油、樟腦油、ベンジーヌ若ハ最經石油(俗ニ揮發油ト云フ)ヲ使用スルヲ得

第八十五條　固形防虫劑モ亦タ地方ノ便宜ニ依リナフタリーヌ若ハ樟腦ヲ使用スルヲ得

第三章　實包

第八十六條　實包ハ彈藥庫、火具庫若ハ彈丸庫ニ貯藏ス

第八十七條　各種實包ヲ同一倉庫ニ格納スル場合ニハ庫内高溫度ノ所ニ黑色藥實包ヲ其ノ低溫度ノ所ニ無煙藥實包ヲ貯藏スヘシ

第八十八條　實包箱ノ堆積法ハ尋常藥ト同要領ニ據ル

第八十九條　實包ヲ貯藏スル場所ニハ混入ヲ避クル爲メ擬製實包ヲ貯藏若ハ携行スヘカラス

第四節　運搬

第九十條　火藥火具類ノ運搬ハ内務大臣及遞信大臣ノ定ムル所ノ規程ニ據リ且第九十一條乃至第九十六條ノ注意ヲナスヘシ

第九十一條　無煙藥ノ輸送ハ成ルヘク乾燥季間ニ於テスヘシ

第九十二條　船舶若ハ鐵道ニ據リ耐熱第百十四條ノ限界以下ニ降リタル無煙藥ヲ運搬スルニハ豫メ之レヲ濕藥トナスヘシ其ノ法先ツ箱内ニ水ヲ滿注シ了レハ之レヲ放流シテ後箱ヲ密閉シ濕分ノ飛散ヲ豫防スヘシ

第九十三條　火具ヲ運搬スルニハ其ノ收容箱ノ互ニ觸突セサル如ク積載スルヲ要ス

第九十四條　荷車ヲ以テ火藥火具類ヲ運搬スルニハ毛布ヲ以テ箱ノ上部ヲ覆フヘシ

第九十五條　夏季荷車若ハ小艇ヲ以テ無煙藥ヲ運搬スルニハ四枚以上ノ毛布ヲ以テ覆トナシ暑熱ノ交感ヲ豫防スヘシ

第九十六條　發條ヲ備ヘサル荷車ヲ以テ無煙藥、火具類ヲ運搬スルニハ車盤上ニ蓆藁若ハ毛布ノ類ヲ敷キ勉メテ震動ヲ豫防スヘシ

第五節　檢査

第九十七條　檢査ノ成蹟ハ順序ヲ歴テ兵器監ニ報告スルモノトス

第一章　尋常藥及黃色藥

第九十八條　尋常藥及黃色藥ハ兵器廠保管ノモノニ限リ毎年一回乾燥季ニ於テ檢査ヲ行フ但シ榴彈ノ黃色炸藥ハ通常製作後五年以上ヲ經過シタルモノニアラサレハ檢査セサルモノトス

第九十九條　前條ノ檢査ハ同種同製造年月ノ堆積毎ニ其ノ最下層ニ就キ之ヲ行フ而シテ其ノ檢査スヘキ箱數ノ比ハ此堆積ノ百分ノ一トス

第百條　黑色藥(漸猛藥ヲ除ク)ヲ檢スルニハ毛布上ニ於テ火藥箱ヲ振盪シ其ノ音響ヲ聽クヘシ而シテ其ノ清音ヲ呈スルモノハ瓦品ナルヲ以テ特ニ其ノ蓋ヲ開キ檢査スルノ必要ナシト雖トモ濁音ヲ呈スルモノ竝ニ其ノ音響ヲ聽キ能ハサルモノハ其ノ蓋ヲ開キ外貌ノ檢査ヲ行フヘシ過振ノ濕氣ヲ吸收シタル火藥ハ粒面光澤ヲ失シ其ノ稜角毀壞シ若ハ粒々結塊スルニ至ルヘシ

第百一條　褐色藥竝ニ漸猛藥ハ火藥箱ノ異狀ヲ呈セサルモノニアリテハ成ルヘク箱蓋ヲ開カサルヲ可トス

第百二條　黃色粉藥ノ著シク青黑色ヲ呈スルモノハ不良品トス

第百三條　黃色榴彈炸藥ハ被包ノ一部ヲ去リテ檢査スヘシ而シテ其ノ褐色ヲ呈セルモノハ不良品トス

第百四條　前條ノ徵候顯著ナラサルモ其ノ變敗ノ徵アル黃色藥ハ分析檢査ヲ行フヘシ

第二章　無煙藥

第百五條　無煙藥(無煙空包藥ヲ含ム)格納中ニ於ケル檢査法ヲ分テ耐熱試驗及遊離酸試驗ノ二種トス其ノ耐熱試驗ハ正規ノ試驗法ニシテ遊離酸ノ試驗ハ已ムヲ得サル事故ノ爲メ耐熱試驗ヲ施行スル能ハサルトキ之レヲ行フモノトス

第百六條　檢査ハ總テ兵器廠ニ於テ施行ス其ノ定期ハ通常每年五月及十月(臺灣ニ在テハ四五兩月間、八月及十、十一兩月間ノ三回)ノ二回トス

但シ製造後四年以上ヲ經過セル火藥竝ニ耐熱降下シ掘氏六十五度ニ於テ二十五分以下ナルモノ及修理藥ハ內地ニ在リテモ本文ノ外每年八月ニ於テ尙一回檢査ヲ施行スヘシ

以上ノ外特ニ火藥ノ異狀ヲ認メシトキ等ニアリテハ尙臨時檢査ヲ施行スヘシ

又夏期長途ノ輸送ヲナス場合ニ在テハ其ノ輸送前後ニ於テ各一回本試驗ヲ施行スヘシ而シテ其ノ輸送前ニ於ケル試驗ノ結果耐熱降下シテ掘氏六十五度ニ於テ二十分以下ナルモノハ其ノ輸送ヲ停止スヘシ但シ修理ノ爲メ輸送ヲ要スヘキ場合ニ在リテハ此限ニ在ラス

第百七條　軍隊學校保管ノ火藥ニ在リテハ凡テ兵器支廠ニ請求シ前條ノ試驗ヲ受クルモノトス

第百八條　耐熱(遊離酸)試驗ハ火藥ノ製造所、種類及製造年月相等シキ各堆積ニ於テ少クモ左ノ箱數ニ就キ施行スヘシ

製造後經過セシ年數	檢査スヘキ箱數
一年以上四年未滿	百分ノ三
四年以上	百分ノ九

但シ臺灣ニ貯藏スル火藥、耐熱降下シテ掘氏六十五度ニ於テ二十五分以下ナルモノ、修理藥及夏季長途ノ輸送ヲナシタル火藥ハ其ノ經過年數ニ關セス四年以上ノモノニ準據スヘシ

第百九條　前條檢査スヘキ箱ハ各堆積ニ就キ上中下各層ヨリ成ルヘク平等ニ抽出スヘシ又次回以下ノ試驗ハ前回試驗ニ開箱セサル火藥箱ニ就キ施行スヘキモノトス

第百十條　檢査ヲ行フニ當リテハ細心事ニ從ヒ苟モ其ノ結果ニ疑ヒアルモノハ猥リニ臆斷ヲ下スコトナク復行シテ判定ヲ下スヘキノミナラス特ニ左ノ諸項ニ注意スルヲ要ス

一　試驗ハ火工所或ハ特ニ設ケタル場所ニ於テスヘシ

二　火藥ニハ日光ノ直射ヲ避クヘシ

三　火藥ニハ如何ナル程度ト雖モ酸類ハ勿論鹽基性ノ物質ヲ接觸セシムヘカラス

四　試驗者ハ試驗著手前手掌ヲ洗滌シ且試驗火藥ニハ決シテ手指等ヲ觸接セシメサルハ勿論試驗火藥竝ニ試驗器具等ニ汗汁或ハ唾液等ヲ滴下セシメサルヲ要ス

五　試驗用諸器具ハ清淨ナルヘク就中玻璃瓶及試驗管ノ如キハ蒸餾水ニテ洗滌シ乾燥セシメタルモノナルヘシ

六　火藥取扱用手袋ハ使用後石鹼水ヲ以テ洗滌シ清潔ニ保持スヘキハ勿論使用前尚清水ニテ洗滌シ乾燥セレメタルモノヲ用フヘシ

但シ使用前ノ洗滌ニハ石鹼ヲ使用スヘカラス

七　蒸餾水ハ一旦煮沸シテ冷却セシメタル後使用スヘシ而シテ蒸餾水及グリスリーヌハ試驗前青色及赤色試驗紙ヲ以テ其ノ中性ナルヲ確認スヘシ

八　耐熱試驗ノ際沃度加里澱粉紙變色ノ景況ヲ比較シ及其ノ良否ヲ檢定スル爲メ空試驗管ニ沃度加里澱粉紙ヲ裝置シ試驗火藥管ト同樣湯煎器蓋孔ニ挿入シ其ノ景況ヲ檢スヘシ而シテ若シ此試驗紙自ラ變色スル時ハ之レカ純良ナラサルヲ示セルカ或ハ容器ノ清淨ナラサルニ起因セルモノトス

九　沃度加里澱粉紙及リトマス試驗紙竝ニ純亞硝酸加里ハ暗所ニ貯フヘシ

十　沃度加里澱粉紙ハ純白ニシテ五萬倍ノ亞硝酸加里溶液約十五立方珊米ニ稀硫酸(稀硫酸ハ硫酸一、蒸餾水五ノ比)二三滴ヲ混和セル液中ニ浸セハ直ニ藍色ヲ呈スヘク之レニ反シ蒸餾水十五立方珊米ニ稀硫酸(前ニ同シ)二三滴ヲ混和セル液中ニ浸セハ直チニ藍色ヲ呈セサルモノナルヲ要ス故ニ試驗著手前必ス其ノ可否ヲ確認スヘシ

十一　火藥箱ヨリ若干ノ火藥ヲ出シ玻璃瓶ニ收容スルニ際シテハ逐次順ヲ追フテ開箱シ決シテ同時ニ同所ニ於テ二箱以上ヲ開箱スヘカラス

火藥ヲ收容スル玻璃瓶ハ黑色紙ヲ以テ包裝スヘシ

十二　試驗火藥ハ小銃藥ニアリテハ其ノ儘、方形藥竝ニ帶狀藥ニアリテハ小刀若ハ鋏ヲ以テ必ス邊緣ヨリ所要藥量ヲ截取シ約小銃藥粒大ニ截斷シタルモノヲ用フヘシ

十三　試驗火藥ハ成シ得ル限リ大氣ニ露出セシムル時間ヲ減縮セシムルコトニ注意スルヲ要ス

十四　試驗ニ用ヰル火藥ハ燒藥スヘシ

第百十一條　耐熱試驗ヲ行フニハ附圖ノ如ク湯煎器ノ口際迄溫湯ヲ充タシ之レヲ五德上ニ裝置シ蓋孔ヨリ寒暖計ヲ挿入シ木栓ヲ以テ之レヲ保持ス次ニ玻璃瓶ヨリ試驗火藥ヲ採出シ試驗管ニ入レ輕打シテ管底ニ集ヲシメ管ノ內高約五分ノ三ニ至ラシム又沃度加里澱粉紙ノ上部ニ蒸餾水ト純グリスリーヌノ等分混液ヲ玻璃棒ニテ潤ホシ之レヲ玻璃桿鉤ニ懸吊シ而シテ此桿ヲ保持セル木栓ヲ以テ管口ヲ掩ヒ試驗紙ノ下緣ヲシテ火藥上面ヨリ若干密米上方ニアラシムル如クス

此ニ於テ湯煎器ヲ熱シ攝氏六十五度ニ至ラシム爾後火力ニ注意シ正シク以上ノ溫度ヲ保持スルニ至ラハ前項ノ試驗管ヲ寒暖計ト同シ深サニ蓋孔ヨリ挿入ス爾後管內試驗紙ノ乾濕分界部ヲ注視シ其ノ淡褐色ニ變色スルニ至ル迄ノ時間ヲ測ルヲ之レヲ耐熱時間トス

第百十二條　遊離酸ノ試驗ヲ行フニハ前條試驗管內ニ於ケル裝置ト同要領ニ據ル卽チ火藥箱ヨリ試驗火藥ヲ採出シテ玻璃瓶ニ入レ瓶ノ內高約五分三ニ至ラシメ次ニ青色リトマス試驗紙ノ上部ニ蒸餾水ト純グリスリーヌトノ等分混液ヲ玻璃棒ニテ潤ホシ之レヲ玻璃桿鉤ニ懸吊シ而シテ此桿ヲ保持セル木栓ヲ以テ瓶口ヲ掩ヒ試驗紙ノ下緣ヲシテ火藥ニ觸ルヽコトナカラシム如此シテ六時間以內ニ試驗紙ノ赤色ニ變スルモノハ不良トス

第百十三條　遊離酸試驗ノ結果不良ナルモノハ別所ニ格納シ置キ可成速カニ耐熱試驗ヲ行フヘシ

第百十四條　保存上許スヘカラサル耐熱低下ノ限界ハ攝氏六十五度ニ於テ十五分以下トス

第百十五條　耐熱前條ノ限界以下ニ降リタルモノアルヲ發見セハ直ニ製造所、種類及製造年月相

等シキ全火藥箱ニ就テ試驗スヘシ

第三章　火具

第百十六條　兵器廠保管ノ火具ハ毎年一回乾燥季ニ於テ檢査ヲ行フ

第百十七條　信管ハ同種同製造年月ノ中ヨリ十分ノ一ノ箱ヲ取リ出シ其ノ箱内信管ノ少クモ五十分ノ一ニ就キ分解檢査ヲ行フ

第百十八條　檢査ノ際變敗ノ徵アル信管ヲ發見レタル時ハ同種同製造年月ノモノハ悉皆檢査スヘシ

第百十九條　變敗信管ハ次ノ檢査ヲ行フ

著發信管　發火試驗

複働信管
曳火信管　著發及燃燒時間ノ試驗

第百二十條　雷管、爆管、門管ハ同種同製造年月ノ中ヨリ千分ノ一ヲ取リ出シ檢査スヘシ若シ變敗ノ徵ヲ認ムレハ其ノ全數ヲ檢査シ疑シキモノハ發火試驗ヲ行フ

第百二十一條　導火索ハ同製造年月ノモノヨリ其ノ端末部約一米ヲ截取シ燃燒試驗ヲ行フ

第百二十二條　藥莖ハ各種毎ニ若干箇ニ就キ保存ノ景況ヲ檢査ス

第百二十三條　火具ノ發火若ハ燃燒試驗ハ射場、特ニ設ケタル場所若ハ建築物ヨリ百米以上隔リタル風下ノ所ニ於テスヘシ

第百二十四條　藥包、藥筒、及彈藥筒ハ毎年一回乾燥季ニ於テ各種類毎ニ若干箇ヲ取リテ分解シ其ノ素質毎ニ規定ノ檢査ヲ行フ

第四章　實包

第百二十五條　兵器廠保管ノ實包ニシテ製作後經過年數五年以上ノモノハ毎年一回乾燥季ニ於テ檢査ヲ行フ

第百二十六條　檢査ハ同種同製造年月ノモノヨリ若干箱ヲ抽出シ其ノ内ノ實包十箇ニ就テ發射試驗ヲ行フ

第百二十七條　發射試驗ニ於テ不發其ノ他藥莢雷管等ノ異狀ヲ認メタルトキハ更ニ五十發ヲ取リテ試驗ヲ續行ス

第百二十八條　無煙藥實包ニ在リテハ別ニ若干發ヲ取リ第二章ノ火藥試驗ヲ行フヘシ

第六節　不良品ノ處置

第百二十九條　無煙藥ノ耐熱第百十四條ノ限界以下ニ降リタルモノハ先ツ速カニ別所ニ隔離シ成シ得レハ消凉ノ日ヲ擇ミ火工所若ハ特ニ設ケタル場所ニ於テ窓ニ日覆ヲ掛ケ火藥箱ノ蓋ヲ開放シ置クヘシ又成シ得レハ室内ニ乾燥セル敷布ヲ布キ其ノ上ニ火藥ヲ展敷スヘシ又其ノ火藥箱ハ内部ヲ消拭シテ後火藥ヲ收納シ然ル後修理若ハ交換ノ手續ヲナスヘシ但シ火藥ノ展敷ハ多時ニ渉ルヘカラス

第百三十條　無煙藥ノ耐熱第百十四條ノ限界以内ナルモ其ノ時間二十分以下ナルモノハ成ルヘク別所ニ格納シ爲シ得レハ前條ト同一ノ處分ヲ施スヘシ

第百三十一條　臨時檢査ノ際耐熱第百十四條ノ限界以下ニ降リタルモノアルトキハ直ニ該火藥ノ種類、製造所、製造年月、其ノ耐熱時間及耐熱降下ノ原因ヲ順序ヲ經テ兵器監ニ報告スヘシ

兵器監ハ前項ノ報告ニ接シ必要ト認ムレハ速カニ各兵器廠ヲシテ前項ト同種類ノ火藥ニ就キ臨

時檢査ヲ施行セシムヘシ

第百三十二條　水濕吸收ノ微アル導常藥ハ倉庫ヲ距ル百米以上ノ安全ナル地ニ架ヲ設ケ架上ニ布ヲ敷キ布上ニ火藥ヲ展開シ一時間毎ニ翻轉シ日光ニ曝シテ乾燥ス

六穀藥ニ微ヲ生シタル者ハ乾燥ノ布片ヲ以テ拭ヒ第百二十九條ニ從ヒ風乾スヘシ但シ連晴ノ日ニ於テスヘシ

第百三十三條　一旦炸藥トナシタル黑色藥ハ篩ニテ其ノ粉末及異物ヲ除去スルヲ要ス

第百三十四條　一旦彈丸ニ塡實シタル黃色藥ハ修理若ハ交換ノ手續ヲナスヘシ

第百三十五條　變敗ノ徵アル火具ハ風乾シ其ノ金屬ニ錆鏽アルモノハ布片ヲ以テ除去スヘシ

第百三十六條　藥莢類ノ變敗ノ徵アルモノハ數日日光ニ曝スヘシ

其ノ蟲害ヲ受ケタル部分ハ修理シ微ヲ生シタルモノハ洗濯スヘシ

第百三十七條　一旦塡藥ヲナシタル藥莢類ハ十分乾燥スルカ若ハ洗濯スヘシ

第百三十八條　藥莢ノ錆鏽アルモノハ布片ヲ以テ拭ヒ去ルヘシ要スレハ至細ナル磨砂ヲ用フルモ可ナリ

第七節　廢品ノ處分

第百三十九條　廢品取扱ノ手續ハ兵器取扱規則ニ據ル

第百四十條　廢棄ノ命令ヲ受ケタル廢品ハ通常次ノ方法ニ據リテ處分ス

一　無煙藥ハ燒棄スヘシ

二　導常藥ハ水中ニ投棄スヘシ

三　黃色藥ハ燒棄若ハ水中ニ投棄スヘシ

四　門管ハ適宜ノ架ヲ設ケ之レニ裝定シテ箇々ニ點火スヘシ如斯クシテ發火セサルモノハ水中ニ於テ火藥ヲ脫シ雷汞ハ燒棄スヘシ

五　火藥ヲ有スル爆管ハ水中ニ於テ分解シ其ノ火藥ヲ抽出シ雷汞ハ燒棄スヘシ

六　複働信管、及曳火信管ノ火道ハ鐵桿ヲ熱シ一箇ツヽ點火スルカ若ハ水ニ浸シテ其ノ火藥ヲ抽出スヘシ

七　不良實包ハ火藥ヲ抽出シ其ノ雷管ハ燒棄スヘシ

八　導火索ハ第三項ニ準ス

第百四十一條　無煙藥及黃色藥ヲ燒棄スルニハ無風ノ日ヲ擇ミ建築物ヲ距ル五百米以上ノ處ニ於テ箱ヨリ抽出シ導火索ヲ以テ點火スヘシ而シテ其ノ一回ニ點火スヘキ量ハ五十瓩ヲ超過スヘカラス

第百四十二條　榴彈ノ黃色炸藥ヲ廢棄スルニハ先ツ水中ニ於テ粉碎スヘシ

第百四十三條　脫藥シタル門管、爆管及雷管ノ雷汞ヲ燒棄スルニハ建築物ヲ距ル百米以上ノ地ニ深サ約一米ノ穴ヲ穿チ穴底ニ炭火若ハ焚火ヲナシ穴ノ一側ニ土堆若ハ適宜ノ材料ヲ以テ掩體ヲ作リ其ノ背後ヨリ一箇ツヽ火中ニ投スヘシ掩體ノ直後ニハ水槽ヲ備ヘ燒棄スヘキモノハ其ノ內ニ貯フヘシ

燒棄スヘキ物料多量ナルトキハ掩體ヨリ五十米以上距リタル所ニ設クヘシ

第百四十四條　不良實包ヲ脫藥スルニハ二箇ノ水槽ヲ備ヘ抽出火藥ヲ其ノ一ニ藥莢ヲ他ノ槽ニ投シ殘藥ヲ流出セシムヘシ

第百四十五條　黃色藥ヲ炸藥トセル不發彈丸ハ爆發縮ヲ以テ其ノ位置ニ於テ爆發スヘシ但シ其ノ

位置建築物ヨリ千米以内ナルトキハ彈丸ノ狀態ヲ變スルコトナク徐々ニ蓆類ヲ以テ包ミ人力ヲ以テ徐カニ運搬シ千米以上ノ地ニ至リテ爆發セシムヘシ

（附圖略ス）

○陸達第百二十二號

明治三十六年陸軍大學校學生入學人員ハ約五十名ニシテ初審試驗ハ同年四月一日ニ開始シ其試驗課目別表ノ通定ム

明治三十五年十二月十日　陸軍大臣寺内正毅

（別表）

明治三十六年陸軍大學校入學試驗科目表

戰術		初級戰術及野外要務
兵器學		概ネ士官學校教育ノ程度ニ據ル
築城及交通學		概ネ士官學校教育ノ程度ニ據ル
地形學		概ネ士官學校教育ノ程度ニ據ル
數學	代數	初等
	幾何	平面、立體
	三角	平三角
外國語學	佛蘭西、獨乙、英吉利、露西亞、支那	文法、原文和譯、和文反譯、會話

備考

一、外國語學ハ佛、獨、英、露、支那ノ内候補者ノ希望ニ從ヒ必ス其一ヲ試驗ス

○陸達第百二十三號

陸軍營繕事務規程左ノ通改正ス

明治三十五年十二月十六日　陸軍大臣寺内正毅

陸軍營繕事務規程

第一條　陸軍所屬ノ土地營造物家屋ニ係ル營繕ハ本規程ニ依ル但シ國防ニ關スルモノニ就テハ別ニ定ムル所ニ依ル

第二條　營繕ヲ分テ新營及修繕トス

新營トハ新築、增築、改築、移築其ノ他土地購買ノ類ヲ謂ヒ修繕トハ土地ノ補修及營造物、家屋ノ移轉、模樣替、補修ヲ謂フ

第三條　營繕ハ各師管ニ在リテハ當該師團經理部長、臺灣ニ在リテハ臺灣陸軍經理部長之ヲ管理スヘシ但シ近衛師團ニ係ルモノハ近衛師團經理部長、砲兵工廠ニ係ルモノハ當該工廠提理、千住製絨所ニ係ルモノハ同所長ノ管理トス

土地營造物家屋ニシテ其ノ使用者所在ノ師管外ニ在ルトキハ使用者所在師管ノ當該師團經理部長之ヲ管理スヘシ

第四條　陸軍省經理局長ハ毎年度九月盡日迄ニ翌翌年度ニ屬スル營繕費豫算標準額ヲ管理者ニ通報スヘシ

第五條　使用者ニ於テ營繕ノ必要アルトキハ毎年度九月盡日迄ニ當該管理者ニ請求スヘシ

第六條　管理者ハ前條ノ請求ニ依リ所管内ニ於ケル土地營造物家屋ノ實況ヲ調査シ尚第四條ノ標準額ヲ目途トシ翌翌年度ニ屬スル營繕費工事所要調書（陸軍省令規程第二條第十三）ヲ調製シ毎年度二月盡日

之ニ陸軍大臣ニ進達スヘシ

第七條　陸軍省經理局長ハ前條ノ圖書ニ基キ營繕費概算額ヲ定メ陸軍大臣ノ決裁ヲ受クヘシ

營繕費概算額確定シタルトキハ經理局長ヨリ決定シタル工事ヲ管理者ニ通報スヘシ

第八條　管理者ハ前條ノ通報ヲ受ケタルトキハ指定工事ニ付キ二十日以內ニ左ノ圖書ヲ調製シ陸軍大臣ニ進達スヘシ

一　工事設計書（陸軍營繕費規程第二條第十四號）

二　經費仕譯書（陸軍營繕費規程第二條第十五號）

三　配置圖　六百分ノ一

四　外面圖　百分ノ一

五　平面圖　百分ノ一

六　斷面圖　五十分ノ一以上

前項ノ圖面ニハ營造物家屋ノ形狀位置ヲ記スヘシ但シ構造ノ複雜ナルモノハ二十分ノ一縮尺ノ局部明細圖ヲ添フヘシ

第九條　砲兵工廠及千住製絨所ニ係ル營繕ニ付テハ第四條乃至第七條ノ手續ニ依ラス翌年度ニ屬スル工事費ヲ積算シテ管理者ヨリ前條ノ圖書ヲ調製シ陸軍大臣ニ進達スヘシ

第十條　土地ノ編入買收還付若ハ借入ヲ要スルトキハ管理者ニ於テ官有地ニ在リテハ該地ノ所轄廳、民有地ニ在リテハ所有者ニ協議ヲ遂ケ其ノ承諾ヲ得タル後之ヲ陸軍大臣ニ伺出ヘシ

前項ノ伺書（還付ノ場合ヲ除ク）ニハ局部明細圖及附近一般圖ヲ添付スヘシ

第十一條　管理者ハ工事所要調書提出前豫メ該營造物家屋ノ圖面ヲ以テ使用者ニ協議シ雙方捺印スヘシ

第十二條　管理者ハ工事ヲ爲スニ當リ衛生上主要ノ事項ニ就テハ當該軍醫部長若ハ獸醫部長ノ意見ヲ問フヘシ

第十三條　工事落成シタルトキハ管理者ハ各室供用等ニ關スル圖面ヲ製シ該物件ト共ニ之ヲ使用者ニ引渡スヘシ

使用者ハ前項圖面ニ反スル供用ヲ爲スヲ得ス

第十四條　使用者ハ土地營造物家屋ニ就キ臨時修繕ノ必要ヲ認メタルトキ若ハ天災地變等ノ爲異狀アルヲ發見シタルトキハ直ニ管理者ニ通報スヘシ

第十五條　移轉、模樣替又ハ天災地變等ノ爲臨時ニ營繕ノ必要ヲ生シタルトキハ管理者ヨリ陸軍大臣ニ伺出ヘシ

第十六條　經易ノ營繕ニシテ技術ヲ要セサルモノニ限リ管理者ノ委託アルトキハ使用者之ヲ施行スヘシ

第十七條　前條掲クルモノノ外營造物家屋ニ對スル工事、土地ノ堀鑿、樹木ノ伐採等ハ使用者ニ於テ之ヲ爲スヲ許サス但シ牧場事業ニ關スル土地ノ堀鑿ハ此ノ限ニ在ラス

第十八條　管理者ハ土地營造物家屋ノ官有財產簿（陸軍營繕費規程第二條第十六ヲ備フヘシ）

第十九條　臨時管理者ヲ設ケタル營繕ニ就テモ本規程ヲ準用ス

○陸達第百二十四號

陸軍身體檢査手續中左ノ通改正ス

明治三十五年十二月十六日

陸軍大臣寺內正毅

第二十九項但書中「衛生部獸醫部」ヲ「各部」ニ改ム

〔參照〕

陸達第二十六號陸軍身體檢査手續(明治三十二年三月二十二日)抄錄

第二十九項　近視ノ者ハ合格トナスコトヲ得ス但軍醫學校生徒、衛生部獸醫部依託學生、同依託生徒志願者ニ在テハ此ノ限ニアラス

○陸達第百二十五號

明治三十五年十二月十八日　陸軍大臣寺內正毅

明治三十四年陸達第六十九號中左ノ二號ヲ追加ス但シ減少ノ期日ハ明治三十六年四月一日トス

八　憲兵司令官ノ職ヲ率スル少將若ハ大佐　一頭

九　憲兵隊長タル佐官　一頭

〔參照〕

明治三十四年十一月陸達第六十九號ハ陸軍軍馬飼養條例第二條定數中當分ノ內減少頭數ノ件ナリ

○陸達第百二十六號

陸軍喇叭譜同喇叭譜目次、同喇叭吹奏歌、同喇叭譜所用區分表別冊ノ通定ム（別掲略ス）

但シ明治十八年達乙第百五十四號ハ之ヲ廢止ス

明治三十五年十二月二十四日　陸軍大臣寺內正毅

○海軍省達第百十五號

海軍准士官以上履歷書及身上取扱規則第十一條中第一號ヲ削除ス

明治三十五年十二月二日　海軍大臣男爵山本權兵衛

〔參照〕

海軍省達第九十六號海軍准士官以上履歷書及身上取扱規則(明治三十一年六月二十三日)抄錄

第十一條　准士官以上ノ定限年齡ハ履歷書ニ登載シタル誕辰ノ月日ヨリ起算シ該年齡ニ達シタル月ノ翌日ヲ以テ服役終期トス」

准士官以上年齡滿限及休職滿期ニ依リ豫備又ハ後備ニ入リ若ハ豫備ヨリ後備ニ入ルトキハ辭令書ヲ下付ス」

○海軍省達第百十六號

明治三十三年十二月達第百七十一號恩給扶助料取扱手續中左ノ通改正ス

明治三十五年十二月五日　海軍大臣男爵山本權兵衛

第五條第三號中ノ「死亡證書」ヲ「死亡診斷書」ニ改ム

第五條第四號中ノ「死亡證書若ハ」ヲ削ル

第一書式中「卒」ヲ「下士卒」ニ改ム

第六書式及第八書式中「年齡」ヲ「誕辰年月日」ニ改ム

第七書式ヲ削リ第七書式ノ一及第七書式ノ二ヲ加ヘ別紙ノ通定ム

第九書式及第十二書式ヲ別紙ノ通改ム

（別紙）

第七書式ノ一　（用紙美濃十三行罫紙）

罹病證書

所轄職官氏名

誕辰年月日

右者何年何月何日ヨリ何處ニ於テ勤務ノ處何年何月何日ヨリ何々ノ症狀ヲ發シタルニ由リ何病ニ罹リタルモノト認ム

右證明ス

明治　年　月　日

職官氏名　㊞

第七書式ノ二

傷病證書

右者何年何月何日何出(処)ニ於テ何某成列則ニ傷リ送院ノ後檀内消毒ニ從事セシ處何月何日ヨリ何々ノ症狀ヲ發シ同症ニ傷リタルニ因リ公務ノ爲感染セシモノト認ム

右證明ス

年　月　日

所轄職官氏　名
誕辰年月日

職官氏　名　㊞

（用紙美濃十三行罫紙）

第九書式

死亡診斷書

一　氏　名　何　某

二　出生年月日　明治何年何月何日

三　所轄官職　軍艦何何等水兵

四　死亡公務傷病死、病死公務傷病死、

五　傷病名　頭部貫通銃創

六　發病年月日　明治何年何月何日

七　死亡年月日時　明治何年何月何日午後何時

八　死亡ノ場所　何港

右證明ス

明治　年　月　日

職官氏　名　印

（用紙美濃紙）

第十二書式

扶助料請求書

右何年何月何日何官爵某何年勅級仕候處何年何月何日死亡仕候然ニハ年入恩給法ニ依リ相當ノ扶助料下賜度證據書類相添此段請求仕候也

職　故官氏　名

何郡何市何町何番地　族(平民)
何郡何市何町何番地寄留
故官位勲爵氏名家族(孤兒)(父母)(祖父母)

年　月　日

氏　名　㊞

請人(二名)親戚(故舊)

現住地

氏　名　㊞

附屬文(書證證書類)
履歷書

府縣知事宛

戸籍謄本
死亡除籍書(第九書式)若ハ死體檢按書
但公務ニ原因セスシテ死亡シタル者ニ在テハ履歴書或戸籍謄本ノミヲ添附スヘシ

〔參照〕
海軍省達第百十七號恩給扶助料取扱手續(明治三十三年十二月二十二日)抄錄
第五條　軍人恩給法第十二條及同恩給法施行規則第二條第二項ニ掲クル書類ハ左ノ者號ニ依リ取扱フヘシ
一　海軍軍人ニシテ公務ノ爲傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リタル者アルトキハ所屬長ハ現認證書及負傷證書若ハ罹病證書ヲ所管長官ニ進達シ所管長官ハ審査ノ後准士官以上ニ在テハ之ヲ海軍大臣ニ進達シ下士以下ニ在テハ之ヲ本人在籍ノ鎮守府司令長官ニ送附スヘシ
三　第一號ニ該當シ現役中死亡シタル者アルトキハ同號ノ例ニ依リ死亡證書ヲ海軍大臣若ハ鎮守府司令長官ニ進達若ハ送附スヘシ
四　前號ニ該當スル者治療ヲ俟タス死亡シタル者ナルトキハ現認證書及死亡證書若ハ死體檢按書ヲ第一號ノ例ニ依リ海軍大臣若ハ鎮守府司令長官ニ進達若ハ送附スヘシ但シ或ル事由ニ依リ其ノ死體ヲ收容スル能ハサルトキハ死亡證書若ハ死體檢按書ニ代フルニ事實證明書ヲ以テス

○海軍省達第百十七號

海軍少尉候補生實務練習規則中左ノ通改正ス

明治三十五年十二月六日　　海軍大臣男爵山本權兵衛

第二條但書以下左ノ如ク改ム

但シ場合ニ依リ第一豫備艦ニ分乘セシムルコトヲ得

海軍少尉候補生病氣其ノ他ノ事故ニ依リ前項ノ順序ニ從ヒ實務ノ練習ヲ行ハシムルコト能ハサルトキハ第二期實務練習ヲ先ニシ第一期實務練習ヲ後ニスルコトヲ得

〔參照〕
海軍省達第百五十七號海軍少尉候補生實務練習規則(明治三十四年十一月十九日)抄錄
第二條　海軍少尉候補生實務練習ハ之ヲ二期ニ分チ其ノ第一期ハ特定ノ練習艦ニ乘組マシメ凡八箇月間ノ練習ヲ以テ其ノ

課業ヲ卒ヘシメ其ノ第二期ハ第一期ノ實務練習ヲ卒リタル者ヲシテ在役各艦ニ分乘セシメ更ニ實務ニ就テ習熟セシムヘシ海軍少尉候補生病氣其ノ他ノ事故ニ依リ前項ノ順序ニ從ヒ實務ノ練習ヲ行ハシムルコト能ハサルトキハ第二期實務練習ヲ先ニシ第一期實務練習ヲ後ニスルコトヲ得

○海軍省達第百十八號

横須賀鎮守府所管汽船初加勢ヘ信號符字左ノ通點付ス

明治三十五年十二月十一日　　海軍大臣男爵山本權兵衛

G Q N F　初加勢

○海軍省達第百十九號

雇員傭人給與規則中左ノ通改正ス

明治三十五年十二月十二日　　海軍大臣男爵山本權兵衛

第七條中「第一條第二項」ヲ「第三條」ニ改ム

第八條ノ次ニ左ノ一條ヲ加フ

第八條ノ二　雇員傭人規則第三條ノ傭人外國出張中又ハ軍艦ニ乘組航海中ハ海軍軍人俸給加俸支給細則中下士卒俸給家族渡ノ例ニ依リ其ノ給料ヲ家族ニ下渡スコトヲ得但シ第三條第一項但書ニ依リ支給スル場合ハ其ノ月末日(休暇ニ當ルトキハ順時繰下ク)トス

○海軍省達第百二十號

海軍文官進級增俸取扱規則中左ノ通改ム

明治三十五年十二月十二日　　海軍大臣男爵山本權兵衛

第五條第一號艦隊司令長官ノ次及同第四號鎮守府司令長官ノ次ニ「要港部司令官」ヲ加フ

○海軍省達第百二十一號

海軍文官考課表規則中左ノ通改ム

明治三十五年十二月十二日　　海軍大臣男爵山本權兵衛

第二條但書及第四條鎮守府司令長官ノ次ニ「要港部司令官」ヲ同條中司令長官ノ次ニ「司令官」ヲ加フ
別表第二號職官氏名トアルヲ「職官(現級俸)氏名」ニ改ム
別表第二號望樓ノ次ニ左ノ一欄ヲ加フ

修理工場		判任官	主管

○海軍省達第百二十二號
吳海軍造船廠ニ於テ製造ノ第二號三等巡洋艦ヲ對馬(ツシマ)ト命名セラル
明治三十五年十二月十五日　海軍大臣男爵山本權兵衛

○海軍省達第百二十三號
軍艦對馬ヘ信號符字左ノ通賜付ス
明治三十五年十二月十五日　海軍大臣男爵山本權兵衛
G Q N H

○海軍省達第百二十四號
軍艦及水雷艦類別等級別表中巡洋艦三等ノ欄內ニ「對馬」ヲ加フ
明治三十五年十二月十五日　海軍大臣男爵山本權兵衛

○海軍省達第百二十五號
明治二十三年達第二百五十八號ヲ廢ス
明治三十五年十二月十八日　海軍大臣男爵山本權兵衛

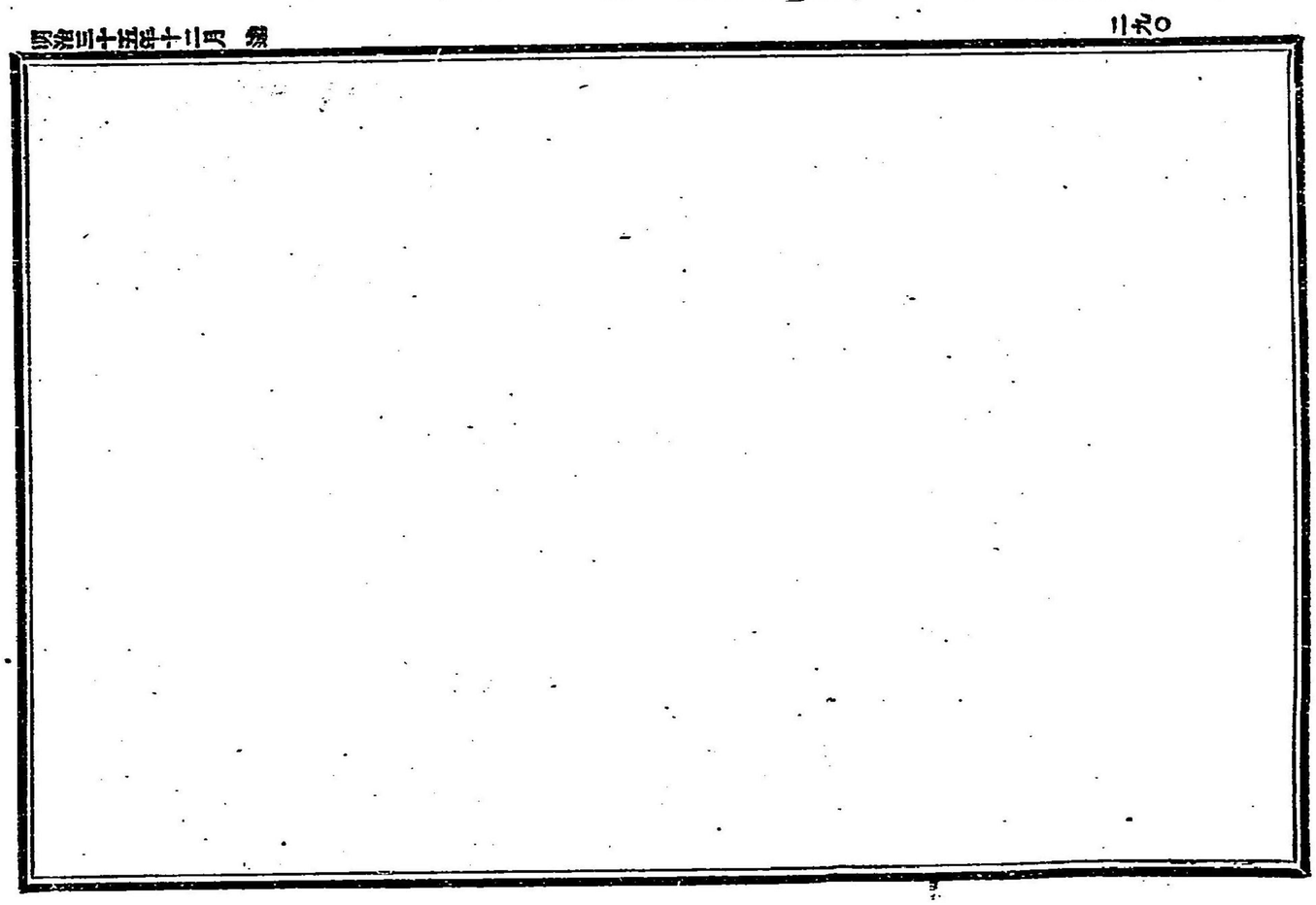
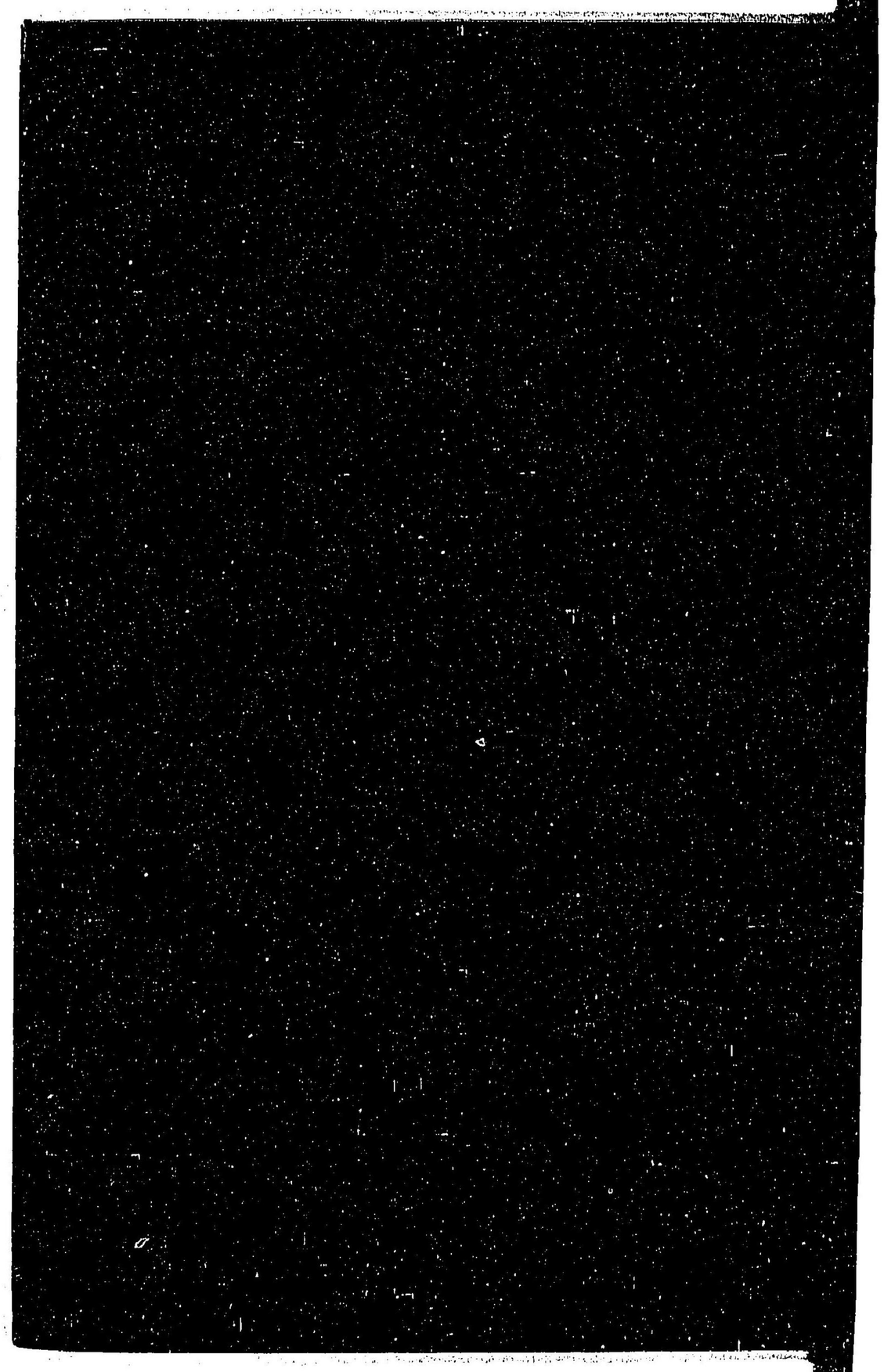
〔參照〕
明治二十三年七月十日海軍省達第二百五十八號ハ五等火夫教科機關術ノ件ナリ

○海軍省達第百二十六號
海軍喇叭譜別冊ノ通定ム
但シ喇叭ハ從來ノモノヲ使用スル儀ト心得ヘシ
明治三十五年十二月二十四日　海軍大臣男爵山本權兵衛
追テ別冊ハ艦隊部用ノ分ハ艦營需品ヨリ供給シ其他ハ之ヲ要スル向ヘ配賦ス（別冊略ス）

○海軍省達第百二十七號
明治十八年丙第六十六號達ヲ廢ス
明治三十五年十二月二十四日　海軍大臣男爵山本權兵衛

〔參照〕
明治十八年十二月十日海軍省丙第六十六號達ハ陸海軍喇叭譜同喇叭譜目次同喇叭譜所用區分表同喇叭吹奏歌ヲ定ムルノ件ナリ

○海軍省達第百二十八號
海軍少機關士候補生實務練習規則中左ノ通改正ス
明治三十五年十二月二十四日　海軍大臣男爵山本權兵衛

第一條ニ左ノ但書ヲ加フ
但シ海軍少機關士候補生病氣其ノ他ノ事故ニ依リ前項ノ順序ニ從ヒ實務ノ練習ヲ行ハシムルコト能ハサルトキハ第二期實務練習ヲ先ニシ第一期實務練習ヲ後ニスルコトヲ得
第六條中「艦內諸配置及業務ヲ習熟セシムヘシ」ノ十六字ヲ削リ「海軍艦團隊將校及機關官教育規則ニ於ケル實務教育中機關官ニ關スル規定ニ準シ之カ教育ヲ施行スヘシ」ノ四十六字ヲ加フ

2万-8